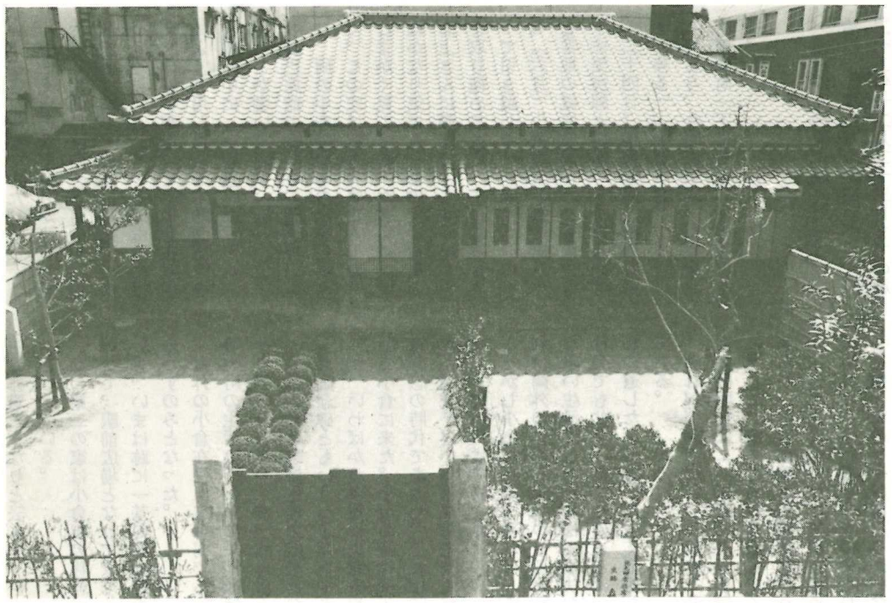
北九州市の文化財を守る会

会　報

No. 38　57. 3. 26

発行　北九州市の文化財を守る会
北九州市小倉北区城内1－1
北九州市教育委員会文化課内
電話　582－2389
振替口座番号　福岡9 393

印刷　株式会社　一文字印刷所
北九州市小倉北区大手町16—27
電話　561－1585



北九州市指定文化財

史跡　森鷗外旧居復元記念特集号

鷗外と小倉

劉　寒吉

小倉師団（第十二師団）に赴任する鷗外森林太郎が東京を発ったのは、明治三十二年（一八九九）六月十六日であった。「小倉日記」にある。

「——午後六時新橋を発す。根本通明氏餞するに藤四郎吉光の短刀を以てす」

この日記一巻が、不遇な小倉時代というものを、鷗外自身いかにきびしくとらえていたかが知られるのは、巻頭に凄愴なこの一節があるためである。根本通明というのは、鷗外の隣家の人で、東大で漢学を講じていた。当時でも頭にチョンマゲを残していたという硬骨の老人であった。

自分は肚を切った気持で、おのれを空しくして西の涯に落ちてゆく、という気持もあっただろう。同時にまた、西方勤務で、もし自分に失敗があったら躊躇なく自決するであろうという覚悟のほどを示しているものと考えられるのである。いずれにしても、劈頭に短刀を閃かした鷗外の心中は容易ならぬものがあったにちがいない。

「——菊池、江口の事は決して他人の上とは思ふべからず、実に危急存亡の秋なり唯しづまりかへりて勤務を勉強し居るより外はなけれども、決して気らくに過すべき時に無之候」

と東京の母に訴えた小倉赴任前後の鷗外の気持は、じつに複雑であった。

当時の東京の軍医部内は、鷗外の小倉転出に反対して一部の軍医がストライキを起しそうな険悪な雲行きであった。そういう関係もあって、新橋ステーションの見送りは案外に雑踏はしなかったようである。その中で乃木中将の見送りは人眼を惹いたにちがいない。森於菟氏の『父親としての森鷗外』の中にある。

名御認可ヲ蒙リ度ク師僧連署ヲ以テ此段及奉願候也

右

明治三十三年拾弐月弐拾八日

玉水豹彩㊞

豊前国企救郡松ケ江村大字畑

曹洞宗玉泉寺住職

養父　玉水俊豹㊞

師僧

福岡県知事　深野一三殿

明治三十三月十二月廿八日

松ケ江村長　廣石松彦

これでみると、願書は早くから提出されていたようであるが、結局認可の日付けは、明治三十八年十月三十一日である。これには、俊虎は慶応三年生れになっているがこれは戸籍改制の時、誤記されたもので俊虎自身も履歴書（筆者蔵）に三年生れとしている。俊虎の生涯については拙稿（「記録」第十一冊小倉郷土会発行昭和四十一年）を参照していただければ幸甚である。

福間博の人となり、行状については「二人の友」に、もっとも良く現われていて、鷗外の福間に寄せる親近感への経過など、また鷗外帰京後、それを追って上京した俊虎と福間の交遊など、淡々たる筆致ではあるが、読む者をして感嘆させずにはおかないのである。

小説「獨身」には、俊虎は、寧国寺さんとして登場している。一部分を抜書してみよう。

間もなく香染の衣を着た坊さんが、鬢の二分程延びた顔をして這入って来た。皆の顔を見て会釈して、「遅くなりまして甚だ」と云ひながら、畳んだ坐具を右の脇に置いて、戸川と富田との間の処に据わった。

寧国寺さんといふ曹洞宗の坊さんなのである。金田町の鉄道線路に近い処に、長い間 廃寺のやうになってゐた寧国寺といふ寺がある。檀家であった元小倉藩の士族が大方 豊津へ遷ってしまったので、廃寺のやうになったのであった、辻堂を大きくしたやうな此寺の本堂の壁に、新聞反古を張って、この坊さんが近頃住まってゐるのである。

主人は嬉しさうな顔をして、下女を呼んで言ひ附けた。

「饂飩がまだあるなら、一杯熱くして寧国寺さんに上げないか。お寒いだらうから。」

戸川は自分の手を翳してゐた火鉢を、寧国寺さんの前へ押し遣った。

寧国寺さんは殆ど無間断に微笑を湛へてゐる。（「鷗外全集」著作篇第三巻五二四頁）

（本会理事・梅光女学院大学講師）

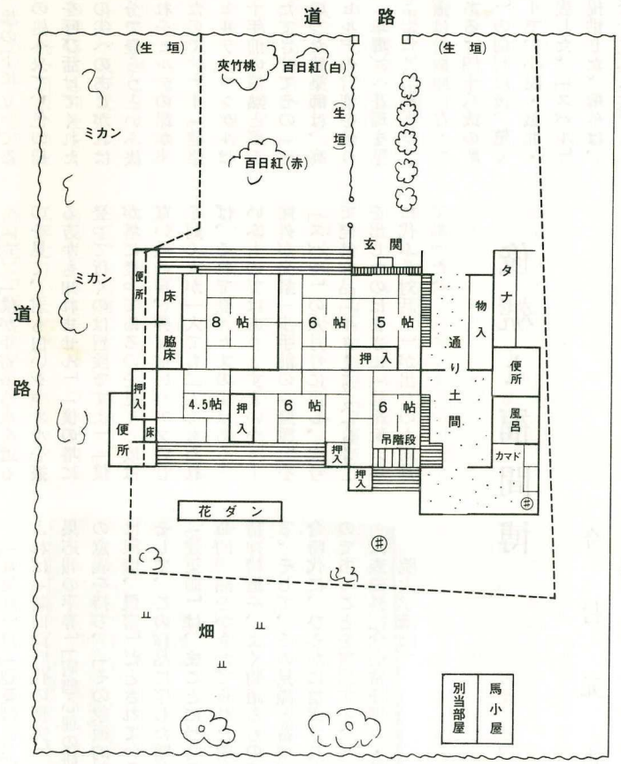
森鷗外旧居メモ

開館　九時三十分から十六時三十分まで

休館　月曜日及び祝日（月曜日が祝日の場合は翌日も休日。一月二、三日及び十二月二十九日から三十一日まで）

入館料　無料

鍛冶町旧居復元図



北九州森鷗外記念会の発足

森鷗外旧居の復元を機に、「北九州森鷗外記念会」（会長・劉寒吉）が発足しました。設立の趣旨は次のとおりです。

◇鷗外と北九州との関係を明らかにするための文献その他の収集

◇講演会・研究会・鷗外の事蹟を顕彰するための事業の開催

◇森鷗外旧居の運営についての協力

入会御希望の方は、「小倉北区鍛冶町一丁目七—二　森鷗外旧居（電話五三一—一六〇四）」に御申込み下さい。年会費二千円。

事務局だより

◇会報第三十八号は、北九州市指定文化財史跡森鷗外旧居の復元と一般公開を記念して特集号としました。

◇特集号は劉寒吉、小林安司、今村元市の三氏（本会役員）に執筆を依頼しましたほか、東京の森鷗外記念会にも寄稿をお願いしましたところ、御多忙中にも拘らず井形卓三氏、野田宇太郎氏、長谷川泉氏から玉稿をいただき、より充実した記念号にすることができました。心より感謝いたしております。

「――出発の時多くない見送人の中に乃木将軍がゐた。将軍は以前から学者としての父を認めて好意を持っていてくれたのである。新橋駅の歩廊で将軍が私を抱いて、成人したら何になるかと聞かれた時、意気地なしの私が逡巡して答へなかったのは、今思ふと遺憾である」

翌十七日は一日中、大阪ですごし、十八日朝発。終点の徳山についたのはその夜中のたしか十二時すぎのはずである。当時は山陽線は全通前で、徳山・門司間は徳門連絡船が往復していた。門司の港についたのは午前三時であった。

門司駅（現在の門司港駅）に近い川卯旅館で朝食をすませて、小倉から出迎えに来た古参の大尉に手伝わせて礼装に着がえる。

「雨がどっどと降ってゐる。これから小倉までは一時間は掛らない」（鷄）

門司のとなりが大里駅で、次ぎが小倉駅である。折から梅雨の頃で雨が降っていた。「がらがらと音がして、汽車が紫川の鉄道橋を渡ると、間もなく小倉の停車場に着く」

すなわち、今は無い小倉の旧駅である。昭和三十三年、小倉駅は紫川の東一〇〇メートルの地点に移り、古い小倉駅の跡にはホテルが建って、すぐそばに小倉西駅という小さな駅ができた。

着任そうそうの鷗外がまず腰をおろしたのは室町一丁目の角の辰巳旅館である。鷗外は「鷄」の中で「達見」としている。鷗外には文字の好みがあって、小倉在住中によく利用した「三木洋食店」を著書の中に「三樹亭」とか「三樹」とか書いている。

辰巳旅館のおかみの紹介で、翌日、雨の中を鍛冶町の家を見にゆく。この家は鷗外の気に入った。こまかく見てまわったすえに「家はかなり気に入ったので、宿屋のお上さんに頼んで、こまかいことを取り極めてもらって、二三日立って引き越した」（鷄）

「（六月）小倉町大字鍛冶町八十七番地の僦屋を観る。」その主を宇佐美房輝といふ」（小倉日記）

「二十四日。午後大雨、鍛冶町の宅に移る」（小倉日記）

つまり、今回修築成った小倉北区鍛冶町一丁目七番二号の家である。

鷗外がこの家に住んだのは、明治三十二年六月二十四日から、翌三十三年十二月二十三日までの約一年半ほどで、「日記」の十二月二十八日には、

「二十四日。京町五丁目百五十番地の家に遷る。門船頭町に面す。是れ劇場の在るところにして、割烹店軒を連ね、頗る熱閙なり。房主は非職官吏なりと云ふ」

となっている。

この第二の家は小倉駅の移転に伴って、駅前広場となって取り払われ、いまは跡に一基の記念碑をのこすのみとなった。

鷗外の小倉在住は三年弱であり鍛冶町の生活はその中の一年半ばかりでしかなかったが、鷗外にとっては、この家は生涯の転機となった記念碑ともいうべき存在であった。いわばかれは深い失意を抱いて小倉に来た。小倉の時代は失意隠忍の時代であった。それは時に「隠流」という変な号を撰んだほど、暗い時代であった。

しかし小倉に住んでみれば、それは鷗外の自尊心を傷つけるような暗い生活でもなければ不愉快な社会でもなかった。そのことはかれの遺した「日記」がよく証明している。

かれが小倉で交わった中で、井上光師団長はよく軍医部内の事情に通じて、鷗外をあつく遇してくれたし、玉水俊虎と福間博という「二人の友」はつねに無聊を慰めてくれた。飛行機研究家の矢頭良一を知ったのも一収穫にちがいないし、小倉の有志家のために東禅寺でしばしば心理学を講じて、市民と接触を重ねたのも意義のあることであった。

「小倉日記」を通読して、おもしろいことを知った。この日記がおもしろいのは、いまはすたれた小倉の古い民俗行事がいろいろと紹介してあることである。

殊に「まつり」はなつかしい。夏には天神社のまつりがある。すぐに盂蘭盆が来る。町に墓の前に立てる竹筒売りや花柴売りの声がひびく、盆には長浜のひろい砂浜で盆おどりがある。くどきの間にはだしの男女が「エトサッサ」とはやすという。これは「ヨイヤサノサ」の聞きちがいである。

くわしくは「サノヨイヤサーノヨイヤサノサ」というのだが、鷗外には「エトサッサ」としか聞こえなかったのであろう。

八月の終りになると、地蔵盆がある。地蔵堂の前に砂の盛り山ができて、それに子供たちが火をつけた線香を立てて詣るのだが、もう戦後はほとんどすたれてしまった。

さらにはお台場の二十六夜待ちも書かれているが、これも小倉駅裏の埋立地が広くなったと同時に消えてしまった。

「小倉日記」は古い小倉をいきいきと再現していて、じつになつかしい。小倉といわず、熊本以北の九州のあちこちが詳細に描かれていて、たとえば熊本の研屋とか佐賀の松川屋などという古い旅館の名までが丹念に残されているなど、私のような旅行愛好の者にとってはまことにありがたい記録である。

鷗外の小倉来住が市民にあたえた影響について、福岡日日新聞小倉支局長も勤めたことのある麻生作男が書いている。

「――森先生の来任は小倉の一般市民にも非常な衝動を与え、未だ先生の顔を知らない人でも、小倉来住を喜ぶという状況でした。先生の謹厳にして温厚な態度は果して人気を呼び、東京に転出の際には一般から大変惜しまれました。

当時の小倉市立病院長や開業医の柴田薫之、それに私の三人が発起人となって、送別会を催しました。

この日は二十一日、会員は二十一人でありましたので先生とお別れした後も先生を追懐するために二十一日会というのを作りました。この会は三年位つづいたと記憶しています」

市民と深く接触した鷗外は市民から尊敬され、鷗外もまた「我をして九州の富人たらしめば」その他の論文によって市民の意識の向上を希求したもののようである。その九州在住はわずか三年足らずだったが、北九州地方に対しても鷗外自身についても、その影響は大きかった。

（本会顧問。作家）

特別寄稿

一枚の写真から

野田宇太郎

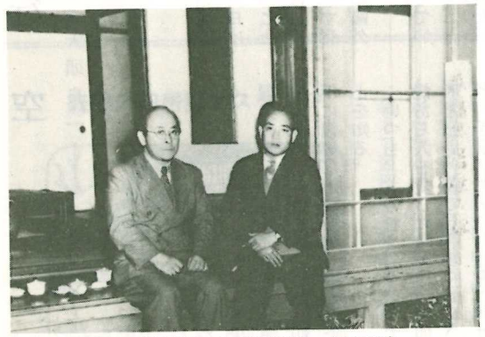
古い写真の中から懐かしい一枚が出て来た。それは昭和二十七年十一月三日に、北原白秋歿後十年を記念して、西日本新聞社の主催で大々的な記念行事が催されたとき、わたくしは火野葦平、奥野信太郎の両先輩と共に、たしか十一月一日は福岡市、祥月命日に当る二日は白秋の郷里柳川市、三日は当時の小倉市で講演をした。その頃火野氏は若松の自宅にゐたから三日共自宅から出て来て、白秋の思ひ出と共に、当時の流行作家としての雑感のやうなことを話し、わたくしと一緒に東京から駈けつけた奥野氏は、すぐれた中国文学者で随筆家としても活躍してゐたから、お得意の中国の怪異小説『剪灯新話』の中の「牡丹灯記」を、ジェスチュア混りに話して聴衆をよろこばせた。後輩ではあるが、この講演会ではわたくしが三回共真打の形で、いつも最後に北原白秋の詩歌を中心とする業跡について語らねばならなかった。火野氏やわたくしは同じ福岡県のいはば白秋と同郷の詩の後輩でもある上に、その頃わたくしは西日本新聞読者文芸欄の詩の選者をしていたから、その縁で記念講演にも引き出されたのだったらうが、奥野氏は陸軍将官だった尊父が曽て大正三年の日独戦争に、中国青島に出征した久留米十八師団の留守師団長をされてゐた関係で、しばらく少年時代に久留米にも住んだことがあったといふこともあったやうだが、それは私事で、丁度昭和二十七年頃は西日本新聞に連載随筆を執筆中だったから、講師として招かれたのだったと思ふ。

その三日目、奥野氏とわたくしは柳川から小倉の講演に移り、その日小倉では講演の前に、明治三十二年から約三年間第十二師団軍医部長として森鷗外が住んでいた鍛冶町と京町の二軒の家（官舎）に案内された。はじめに書いた懐かしい古写真というのは、その日たしか小倉在住の劉寒吉氏の案内で最初に訪れた鍛冶町の家の表庭に面した座敷の縁側で、奥野氏とわたくしをその時同行した新聞社のカメラマンが撮って、あとでわたくしに送ってくれた記念写真である。

この昭和二十七年十一月の白秋十年祭が縁となって、翌二十八年一月からわたくしは西日本新聞に『九州文学散歩』を連載することになり、一度帰京するとその下調べのためわたくしはすぐにまた十二月には、九州全土に亘る文学散歩の旅をして、鹿児島から大分県をめぐって日豊線で再び小倉を訪れ、鷗外が最初に住んで、後に小説「鷄」に書いた鍛冶町の家を訪れ、鷗外時代からその家の所有者だった宇佐美家では鷗外が住んでゐた頃と少しも変らないという母屋内を全部調べることを許され、わたくしも、その前年から使用してゐたキャノン一・九といふ新らしい写真機で、スケッチ代りに幾枚も撮った。そのフィルムは今でも大切に保存している。

北原白秋の記念講演会が縁となって、鷗外の小倉の小説「鷄」の家で奥野氏と一緒に撮ってもらったその写真は、その後奥野氏が昭和四十三年一月、六十九歳で急死されてからは、一層大切な記念写真となった。その三日間の講演で、まだ柳川や太宰府都府楼跡などでも一緒に撮った写真もあるが、その中で、小倉の鷗外旧居での写真がわたくしには最も懐かしいのには、また別な理由もある。それは二人ではじめて旅客機に乗り、（それは伊豆大島で木星号といふ旅客機が墜落して搭乗者全部が死亡した、あの惨事の直後だった）九州を訪れることになる前の昭和二十四年に、慶応義塾大学の教授として三田文学会の会長でもあった奥野氏に頼まれて、わたくしは慶応義塾大学の塾監局から永井荷風編集で創刊された「三田文学」関係の人々のために、後に小倉の鷗外文学碑を設計した谷口吉郎氏の設計で完成したばかりの会議室で、森鷗外と慶応義塾といふ話をしたことがあったからである。そのときわたくしは若気の至りで、いささか酒気を帯びていた久保田万太郎の傲慢無礼な態度に腹を立てて、講演の途中で、いきなり、三田天皇とまでいはれた久保万を叱りつけた。決して云ひ争ったのではなく、一方的に人を人とは思はぬ態度に怒りをぶっつけたのである。そのときメーンテーブルには旧塾長の高橋誠一郎氏や塾長の潮田氏、若い頃三田に学んだ佐藤春夫氏などもキラ星の如く並び、わたくしの隣りには西脇順三郎氏が居られたが、このことは二、三の人の本にも書かれてゐるので、詳はしくは述べないが、いふべきことだけ云ってすぐに席を立たうとすると、さすがに久保万の態度を見かねてゐたらしい人々から、まあまあと引きとめられ、わたくしはすぐに冷静になって、何とかその日の講話の責だけは果した。そのとき三田文学会の会長としてわざわざわたくしをゲストとして招いた奥野氏には、すまないことをしたと思った。それから三年後共に九州へ飛ぶことになった頃はもうその事件も過去の笑ひ話になってゐた。といふのも、奥野氏もまた同大学の先輩とはいへ久保万には予てからあまり好感を抱いてゐなかったからである。

また、白秋の記念講演のおかげで、小倉の鷗外遺跡をはじめて訪れたことにもわたくしは一つの因



鷗外旧居縁側　左が奥野氏　右は筆者

縁を感じないわけにはゆかない。それは白秋が木下杢太郎や洋画家の石井柏亭達と共に、東京の隅田川のほとりを中心に、明治末年の新文学運動として起してゐたパンの会の頃から、白秋は雑誌「スバル」の執筆同人として、同誌の特別寄稿家だった鷗外を敬慕し、所謂鷗外邸の観潮楼歌会の定連として柳川の中学伝習館以来の短歌も再び作りはじめ、また白秋が弟鉄雄と共に北原家再興の目的で開業した阿蘭陀書房から豪華な文学雑誌「ARS」(アルス)を創刊した大正四年の頃からは、鷗外も「ARS」に小説を寄稿したほか、同年には詩集『沙羅の木』を白秋の乞ひに応じて阿蘭陀書房から出版するなど、白秋を様々な形で応援してゐるからである。もちろん白秋は生涯詩歌一筋の稀有の詩人だったから作品的に鷗外の影響は受けなかったまでも、生涯鷗外を近代最高の文学者として敬慕した一人であったことはいふまでもない。小倉での白秋記念講演のときわたくしは鷗外との浅からぬ関係についても特にふれたと記憶するが、今はその時の速記録もないので、どの程度喋ったかを言明することが出来ないのが残念である。

(森鷗外記念会常任理事・評論家)

森鷗外旧居復元を祝して

北九州市の文化財を守る会会長　加瀬康作

北九州市指定文化財　史跡　森鷗外旧居の復元を心からお祝い申し上げます。

森鷗外先生が陸軍第十二師団軍医部長として小倉に勤務しており居住したこの家は、昭和四十九年文化財に指定されましたが、個人の住居であったため一般公開されず、鷗外文学研究者を始め文化財に関心を持つ人達にとって非常に残念なことでした。したがいまして市の買収、そして今回の復元一般公開は、私達にとってこの上もない喜びであります。本会もこの森鷗外旧居の公開を機に、よりいっそう郷土の文化財の保護に努力してまいりたいと存じています。

なお本会では、旧居復元を記念して会報三十八号を特集号としました。執筆者には鷗外文学に造詣の深い方々にお願いしましたので、内容のある紙面となっています。御期待ください。

天馬行空

――森鷗外と矢頭良一――

小林安司

小倉で、森鷗外が十年来の名訳「即興詩人」の業を完成した日は明治三十四年の一月十五日のことであるが、それから一ヵ月ほど後のある日、一人の発明家を志す青年が、何の前触もなく京町の鷗外邸を訪れた。

鷗外は「小倉日記」に記している。

「二十二日。雪。当国築上郡岩屋村の人矢頭良一といふもの来訪す。自ら製する所の自動算盤を出して眎し、且曰ふ、曽て羽族飛行の理を窮めて一書を作り、将に人類蜚行の機械を製せんとす、唯々資力の乏しきを憾むのみと。矢頭の父を道一といふ。岩屋村長たり。」

これは発明青年の矢頭(つ)良一が県立豊津中学を中退、専ら飛行機の考案に沈頭して七年、新たに脱稿を終えた「飛学原理」と、新作の自動算盤(そろばん)の模型を手にして、福岡日日新聞社の高橋光威主筆の紹介状をたよりに、鷗外への初対面が叶った時のことである。

十日後、矢頭が再度訪れた時にも、「三月一日。雪。矢頭再び至る、乃ち為めに飛行機の沿革を説く。……」と記し、後年「衛生新編第五版」に(飛行船及飛行機)を入れた鷗外のこと、この発明青年に親切な指導を惜まなかったことを知る。

いつも、おのれを慕う若くて才能ある人を愛した鷗外は、翌四月軍医部長会議で上京の折にも、わざわざ東京大学に中村清二、田丸卓郎の両教授を訪い、矢頭の為に仲介の労をとってやっている。

こうした鷗外の支援に力を得て豊前の有力者を後援者に持ついたった矢頭は、早くもその年の十月には発明事業にとり組むため上京を決行した。

鷗外が東京の母峯子宛の書簡で矢頭を誉めたのはその頃のことである。

「……矢頭良一に御面会被成候由兎に角めつらしき男と存□候　学問は無けれども器械の事にては誰にも負けぬといふ気□にて居るところ感心と存候。……」

上京した矢頭は、小石川に工場を設け、飛行機の開発資金調達のため、自動算盤の製品化をはかり三十六年一月、一器で加減乗除のできる製品を完成、専売特許権をとるや、「パテント・ヤズ・アリスモメートル」として神田の矢頭商会から発売を開始して好評を博した。因に近年、この製品は国産自動計算器第一号と見做されるにいたった。(読売新聞五三・一〇・一七)

これより先、矢頭は理科大学の動物学研究室で、たまたま読んだ「アニマル・メカニズム」にヒントを得て、早繰り(早引き)辞書の考案を進め、先ず英辞典、次で漢字典に成功をおさめ、三十七年十二月には早繰り式漢字典一千部を麹町の矢頭商会、日本橋の富士屋より発売するにいたった。これも今日から考えると戦前中国で行われた王雲五の四角號碼検字法に比肩するもので、矢頭の優れた発明家的頭脳の所産に他ならなかった。

すでに、この三十七年一月には「中央新聞」に十二回連載で「少壮なる発明家矢頭良一氏」が紹介されたが、前年アメリカのライト兄弟の飛行機成功は、この年の日露戦争勃発と相まち、彼の飛行機製作への情熱は高まるばかりで、四十年に自動算盤販売拡張で福岡に行った時には「福岡日日新聞」に「空中飛船研究の必要」(四回)を寄稿し、「空中飛行機研究家矢頭良一氏」(二五回)も連載された。

かくて彼の飛行機試作事業は漸く機が熟し、東京の井上馨侯や鮎川義介、豊前の柏木勘八郎、筑前の貝島太助ら諸名士の資金面の後援をとりつけ、この年始て小石川の護国寺附近に待望の工場を開設するが、父道一も豊前から家族をまとめて東京へ引越し、一家を挙げて良一の事業を助けることになった。

然るに不幸にも、良一は翌四十一年に宿痾の肋膜炎が再発し、折角緒についたばかりの飛行機試作の悲願半ば、十月十六日病状が悪化して遂に不帰の客となった。

父道一による「遺言書」の記述によれば「……死ハ天命ナレバ致方無之、然レドモ我ハ予テ仏教ノ所謂輪回説ヲ信ズルモノナレバ、世々代々生レ替リ死ニ替リ、一度ハ此事業ヲ我国ノ為メ、世界人類ノ為、成功ヲ期シテ恩ニ報ン」と云い終り、念仏三唱こと切れたという。時に良一は年齢三十歳であった。

矢頭良一

一方、鷗外が矢頭の最後を知ったのは、それから半月ほどたって、「四十一年日記」の十一月の条に「五日(木)、法科大学生柏木純一来て、矢頭良一の死を告ぐ。……」と見え、「七日(土)、妻を矢頭の家に遣り、弔問せしむ。父道一枢を守りてありとなり。」につづき「十四日(土)、……法科大学生某来て矢頭良一追悼会の発起人たらんことを請ふ。諾す。矢頭道一記念ふくさを贈り来たり。良一の法諡あり。一乗院釈顕意徹到居士　明治四十一年十一月十九日と記せり。」と、亡き矢頭を偲びさらに、「二十一日(土)、……矢頭道一来訪す。母と妻とにて歓待す。」とある。矢頭の三十五日忌には東京と郷里で追悼の法事が催されたが、日記によれば父道一が森家に返礼に往き歓待に与ったことがわかる。

越えて翌四十二年七月、鷗外が「鶏」執筆中の頃、矢頭の母たみの来訪が日記に見えたが、三年後の明治四十五年の日記の中に、突如として

「三月二十三日(土)、薄曇。払暁に稍寒くなる。……矢頭道一がために天馬行空の四字を書す。」

の記事が目をひく。

これより先、明治四十三年十二月には、周知のように、徳川、日野両大尉がアンリ・ファルマン機を操縦して代々木上空で我が国最初の飛行に成功をおさめ、日本航空史を飾っている。

森鷗外が矢頭良一の為に贈った鎮魂の偈〈天馬行空　源高湛書〉の一軸は、いま築城飛行場に遠からぬ郷里豊前市の遺族の家に大切に収蔵されている。

(本会顧問。北九州市立中央図書館長)

祝辞

森鷗外記念会理事長　井形卓三

かねて劉寒吉先生や市立中央図書館館長小林安司先生からの御通信或いは御連絡を頂いておりましたので、御地鍛冶町の森鷗外旧居復元計画の経緯と内容についてその概要を承知し、非常に期待致しておりましたところ、この程計画は予定通り進捗して、日時まで鷗外先生にとって一つの重要な意味を持つ三月二十六日に開館式を挙行する運びとなった由重ねて御連絡に接し、同じく鷗外先生を敬慕するお仲間の一人としてまことに欣快この上もないことと存じ、深い感動を覚えております。

思うに、この計画はユニークな大事業と申すべく、何分にも素材となる古い木造家屋を極力旧態を保ちつつ、場所もそのままに復元保存されるのでありますから、よくよく綿密な調査と周到な準備あってのことと存じますが、その御苦心の程は第三者の想像を遥かに越えるものがあったと存じます。改めて谷市長様を始め貴市教育委員会の各位、並びに貴会関係の皆様方の長期に渉る御熱意と御尽力に対し、衷心からの祝意と敬意を捧げますと共に、今後復元なった旧居を一大拠点に、貴会の弥が上の御発展をお祈り申し上げます。

昭和五十七年三月二十六日

森鷗外旧居記念スタンプ

(松見ムクロ氏デザイン)

特別寄稿

「建築師」の示唆

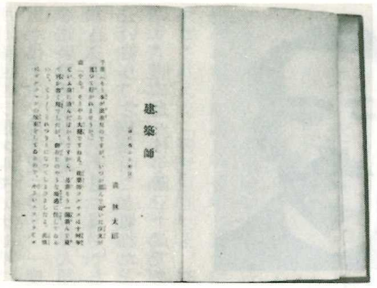
長谷川　泉

森鷗外の小倉在住は、明治三十二年六月十九日から明治三十五年三月二十六日までである。その後日露戦役に際し第二軍の軍医部長として出征したが、明治四十年十一月十三日陸軍省医務局長に補せられた。「スバル」が創刊されて鷗外の文壇面活躍の時代が訪れるのは、明治四十二年一月からである。

小倉時代の蓄積は、極めて大きい。文学的素材としては、のちに「鶏」「二人の友」や「興津弥五右衛門の遺書」「阿部一族」などに燃焼するものをえた。クラウゼヴィッツの「戦論」を契機として軍・政界の実力者山県有朋との強い結びつきができた。名訳、アンデルセンの「即興詩人」の翻訳が完成した。逍遥との没理想論争いらいの宿題であった「審美綱領」など、美学上の業績がまとめられた。唯識論や心理学及び梵語やフランス語などの習得にも利便をえた。「心頭語」「続心頭語」の人生論をえた。二人めの夫人志けを得た。（独身で赴いたことの一つの反応も見ようる）いわゆる学問的な勉強と、境遇が然らしめた人間的成長によってスケールが大きくなった。

大要、以上のような蓄積があって、医務局長になっても、すぐに旺盛な文学活動に赴くのではなく陸軍における地位の安定と「スバル」の創刊のことが表裏をなして明治四十二年から堰を切ったような文学活動の豊熟の時代を迎えることになる。

この鷗外が千葉鉱蔵（掬香）訳のイプセン原作の戯曲「建築師」（明治四二・七・二二、易風社）に序として「建築師（序に代ふる対話）」を寄せている。その内容は、文壇面活躍の鷗外の心境と姿勢を示唆している点で、極めて興味深いものがある。この文章は、のち「我一幕物」（大正元・八・一五、籾山書店）に収録された。易風社文の終末には「（明治四十二年七月十七日）」とあるが、鷗外日記（明治四二・七・一六）に



は「対話建築師を草して千葉鉱蔵に遺す」とあり、二日後の十九日の日記には「対話建築師を校す」とある。原稿の執筆・校正、本の発行が急がれていたことは、以上の日付を追うことによって察せられるが、「建築師（序に代ふる対話）」の冒頭に「千葉『もう本が出来たのですが、いつか頼んで置いた序文が貰って行かれませうか』森『やあ。そりゃあ大変ですねえ。……』」とあることなどによっても理解される。

鷗外の言いわけには「建築師ソル子スは十何年といふ前に読んだばかり」「御存じのやうな境遇に住してゐる」「此頃ボルクマンの校正をしてゐる」とあることなどに度読みかえしての執筆が不可能であったとある。現に、イプセンの「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」の訳は明治四二・七・六―九・七「国民新聞」に連載され、単行本は明治四二・一一・二〇、画報社から刊行されている。

以下、鷗外の発言の中から重要な言葉を拾い、解説してみよう。

（一）戯曲の主人公のハルワルト・ソルネスについては「自分の精力の足りないのを知らずに、空想に欺かれてゐる、気の毒な人物で、僕は余りシムパチイを持ってゐませんね」と言い、だが、「僕なんぞは随分身につまされるといふやうな処がある」とし、その気の毒な男の言動が「ひしひしと身に染みるといふことも有り得る」としている。そしてさらに「実は僕なんぞも矢張ソル子スなのかも知れませんよ」と、肯定もしている。この言を理解するためには、主人公の建築師ソルネスについての解説が必要であるが、それについては、鷗外の序につぐ巻頭の千葉鉱蔵の自序というべき「建築師管見」によるのが便利である。「建築師は、老工人の幸福を奪ひ、少き工人の独立せんとするを圧伏し、又自分の妻の殆んど、脱殻の様な、義務の偽人とも云ふ様になったを、心中では甚く不愧に思ひ、良心に不安を感じ始め、憂悩の余り、遂に神経を衰損して、半ば狂人となって仕舞ふ」とあるのが、それである。―「空想」と鷗外が言っている理想と情熱の夢にかけた気持が、よくあらわれている。

（二）「古い事を言ふやうですが、僕だってリサンゲルの塔の占風旗に輪飾を掛けるやうな事をしたこともありますからね。（間。）若い時代の夢のうちで」―ドイツ留学時代のミス・エリーゼとの恋愛体験や、帰国後の政・官界入りの策動や、「東京医事新誌」主筆の座を追われることになった医事論争や、陸軍での地位が不安定の間に文学活動を旺盛に行ったことなどが考えられる。

（三）「子供幾人かのおとっさんになって、ぐづつとして一間に閉ぢ篭ってゐます」―鷗外は小倉時代に志け夫人と二度めの結婚をした。「建築師（序に代ふる対話）」が出されるまでに、前夫人登志子との間に於菟（明治二三）、志け夫人との間に茉莉（明治三六）、不律（明治四〇、夭折）、杏奴（明治四二）が生まれている。

（四）「戸の外には、新時代の恐ろしい若者達が復讐の刃を磨いてゐるやうな心持がするのです」―「明星」の廃刊から「スバル」創刊にいたる時代の流れは、新・旧の文学エネルギーの交替期にあることを察せしめる。

（五）「その時戸が不意に開いて、可愛らしいヒルデ・ワンゲルが這入って来ますよ」「僕の処へ来たヒルデは昂です。」「ヒルデの

昂も新時代の旗の下に立ってゐて、そして僕の処へ来て、色の褪めた僕の記憶を呼び活けてくれたのです」「塔の尖へのあこがれはあっても、自分で登らうといふ決心はない。それをヒルデの昂が来てそそのかしたのです」―「建築師」におけるヒルデ・ワンゲルは謎の美女で、十年前の情熱と夢を建築師にかきたてさせてその「そそのかし」にのった建築師は、高い塔に上り、ヒルデの言葉を借りれば、「隔板（車翼）へ花環を懸け」「人間業で出来ない事を為て」墜死する。頭蓋は粉微塵になって即死したのである。四十八歳の鷗外は「スバル」の創刊以後、驚くべきエネルギーで、小説・戯曲・翻訳などを発表した。「スバル」がその舞台を提供した。鷗外は、「スバル」を美女ヒルデに擬した。その「スバル」（明治四二・五）の「椋鳥通信」欄に、全世界を蔽うことになる前衛芸術のマニフェストであるイタリア詩人マリネッティの「未来主義の宣言十一箇条」をいち早く全文訳出・紹介した。そして紹介文の最後をこの宣言文との比較で「スバルの連中なんぞは大人しいものだね。はゝゝゝ」と結んだ。マリネッティの宣言の衝撃に触発されての言であるが、「スバルの連中」の中には鷗外自身も入ることを考えれば、自嘲の言とも読みとれよう。

（六）「僕が年寄の冷水を遣るのを見て、君も白いショオルを振る方かも知れません」「僕の塔に登って行くのは冒険ですよ」「僕が塔に登ってゐるのを見て、歌はない歌の声、弾ぜないハアプの音を聞く人が一人でも二人でもゐれば、それで登った丈の事はあるといふものではありますまいか」―鷗外が発禁一歩手前の「魔睡」を「スバル」の六月号に出し、次号で発禁作品「キタ・セクスアリス」を出したのはまさに「建築師（序に代ふる対話）」が出たのと同月であった。

「建築師」は「建築師管見」によれば「新旧両時代の衝突」「因果応報の平等」「病態心理の研究」の意義を持ち、「その象徴的対話は深邃、豊富」だとされている。そして、この作品に序した鷗外の「建築師」は、まことに当時の革命的情熱をかきたてられた鷗外の精神構造を、よく物語るものである。そして、その見識と蓄積が小倉時代に、ひそかに培養されたものであることを痛感する。

（森鷗外記念会常任理事・学習院大学講師）

俊虢と福間博

今村　元市

「私は豊前の小倉に足かけ四年ゐた」鷗外の小説「二人の友」の冒頭の一節である。北九州市庁舎にほど近い紫川畔の鷗外文学碑の一面に、この文が刻されている。「二人の友」のモデルになった人物が福間博と玉水俊虢である。すなわち小説中のFさんと安国寺さんである。

森鷗外「小倉日記」

明治三十二年十月十二日

公退後一客に接す。福間氏、名は博。石見国安濃郡刺鹿村の人。明治八年五月二十二日生る。卒然予に語りて曰く。曾て東京に在りて先生の教を承けんと欲す。先生の事多きを知るを以て敢て請はず。今先生僻境に在り。必ずや多少の閑暇あらん。幸に我に独逸文学の蘊奥を授けよ。此数百里の行をして徒労に帰せしむること勿れと。予聞きて半信半疑し、試みに坐右の独逸書を抜きて読ましむるに誦読飜訳、百に一失なし。乃ち允（ゆる）して毎夕一時間来りて疑を質さしむ。（岩波戦後第二版鷗外全集第三十五巻三〇二頁）

福間博の経歴については、前記「鷗外」第十号に掲載されている山口高等学校および第一高等学校における履歴書が、もっとも確実なものであろう。この履歴書は、小林安司北九州市立中央図書館長の努力によって明らかになったものである。「小倉日記」には、福間は五月二十二日生となっているが履歴書は、山口高、一高とも二十三日になっている。生地の刺鹿村は、現在、島根県大田市久手町である。福間は明治三十三年九月から東京帝文館中学講師、同三十五年十一月山口高等学校教授、同三十八年四月第一高等学校教授を歴任し、同四十五年二月三日病のため死去している。福間と鷗外の交遊は「二人の友」に詳細に述べられている。

福間　博

玉水俊虢が「小倉日記」に登場するのは、

明治三十三年十一月二十三日

新嘗祭。幸田成行書を寄せて曰く。雪紛々、三保物語等の稿完く成りぬと。曹洞の僧玉水俊虎（ママ）将に小倉安国寺を再立せんとし、来りて勧進文稿を刪定せんことを請ふ。（岩波戦後第二版鷗外全集第三十五巻三五二頁）

これ以後、鷗外と俊虢の交遊が初まる。

玉水俊虢は、慶応二年（一六六六）三月二十三日、豊前国行事町（現・行橋市）の生れ。幼名を九市と称し、明治十二年、企救郡松ケ江村大字畑（現・北九州市門司区畑）の玉泉寺において、玉水俊豹和尚により得度、豹彩と改め、更に三十八年十月三十一日、俊虢と改名している。戸籍上の本名も俊虢である。この改名についての資料を得たのでこれを次に記す。

玉水俊虢

改名御願

福岡県豊前国企救郡松ケ江村
大字畑二百二十五番地
玉水俊豹養子
改名俊虢（ママ）　玉水豹彩
慶応三年三月二十三日

私儀仏道修業仕終身仏教受任志願ニ付曹洞宗々制第七号僧侶分限規則ニ拠リ朱書首標之通リ改